

黄道周年譜（一五八五～一六四六）附蔡玉卿（一六一二～一六九四）

河内 利治（君平）編

【凡例】筆者はかつて黄道周の「年譜稿」を編んだが（一九八五年度筑波大学芸術研究科修士論文「黄道周」所収）、本稿はその年譜稿をもとに改稿したものである。基本とした主たる黄道周の年譜史料および参考文献は、次の通りである。

○明洪思撰「黄子年譜」（略称【洪譜】、侯真平・婁曾泉校点『黄道周年譜附伝記』福建人民出版社一九九九年九月所収）

○明莊起儔編「漳浦黄先生年譜」（略称【莊譜】、陳寿祺編『明漳浦黄忠端公全集』内閣文庫蔵・道光十年刊本・略称『黄漳浦集』所収および侯真平・婁曾泉校点『黄道周年譜附伝記』所収）

○侯真平「紀年考」（『黄道周紀年著述書画考』廈門大学出版社一九九四年八月所収）

○傅紅展「黄道周年表」（『中国書法全集56黄道周』榮寶齋一九九四年十一月所収）

蔡玉卿の史料は、『漳浦県志』卷之十六・人物下・閩閩（乾隆二十七年～一七六二）刊本・中国方志叢書・第一〇五号・成文出版社印行（抛民国十七年翻印本）および明洪思撰「文明夫人行状」（『黄漳浦集』巻首所収および一九六二年三月出版・台湾銀行経済研究室編印・台湾文獻叢刊一三七種『黄漳浦文選』第三冊「附録一」所収、注1）に拠った。

先ず西暦・干支・王朝・皇帝・廟号・黄道周年齡・蔡玉卿年齡の柱を立て、ゴチック体で記す。次に月日を追って事項を記す。『黄漳浦集』所収の詩文は、題名と巻数を記した。

制作年が明確な書画作品を《》で示した。参考文献は、榮寶齋『中国書法全集56黄道周』と上海人民美術出版社『墨迹大観黄道周』（一九九二年十二月刊）である。前者の掲載番号を数字のみで記し、後者の掲載番号を「迹」字プラス数字で記した。また文物出版社『中国古代書画図目』に図版が掲載される作品はその番号を付記した（例、京1-2778）。

収蔵機関は略称を用いた。（故宮）は故宮博物院、（上博）は上海博物館、（南博）は南京博物院、（遼博）は遼寧省博物館、（浙博）は浙江省博物館、（蘭）は台北蘭千山館、（東博）は東京国立博物館、（首都博）は首都博物院、（個）は個人蔵である。その他は正式機関名を記述した。

一五八五 乙酉 明 神宗 萬曆十三年 一歲

二月九日

福建漳郡銅山所（今の東山県）深井村に生れる。初め螭若と字し、後に幼玄（元）、幼平また細遵と字する。学者は石齋先生と称す。曾祖父の代に莆陽から銅海に移住した。

曾祖父黄宗徳（侃介公、東門慧公）・曾祖母林氏

祖父黄世懋（肅毅公、享年四十歳）・祖母翁氏（私諡は勤勤、享年八十三歳）

父黄季春（一五四四〜一六〇七、字は嘉卿、私諡は青原、三男）

母陳氏（一五四八〜一六二六、太夫人、太孺人、青原夫人、黄氏文母、壺師、後山陳公の娘、陳王教の姉）

兄黄道琛（別名士珍・匪石、黄道周より十六歳年長）

先室林氏（？〜一六二三） 継室蔡玉卿（一六一二〜一六九四）

一五八九 乙丑 明 神宗 萬曆十七年 五歳

私塾に入学。「論語」を受講し、疑問を發して教授者を困らせる。

一五九一 辛卯 明 神宗 萬曆十九年 七歳

父青原公が会城（漳州）に行き、「通鑑綱目」を買い背負い帰る。自ら訓点を施し、道周は朝夕に読書し、忠

良邪正の弁と人治王道の大を知る。曹植の詩を愛し、父の叱責に遭う。

一五九二 壬辰 明 神宗 萬曆二十年 八歳

比偶文（駢文）を作る。一人書物を挟んで最高峰まで喜び走り、松欒石によりかかり踽踽として帰ることを忘

れる。兄と本島の漁鼓溪頓坑で読書する。経伝子籍・詩賦声律・鉛汞陰陽の学を涉獵し始める。

一五九三 癸巳 明 神宗 萬曆二十一年 九歳

銅山島漁鼓溪頓坑で読書する。文章を作ることを学び始める。

一五九四 甲午 明 神宗 萬曆二十二年 十歳

古文詞を作る。

一五九六 丙申 明 神宗 萬曆二十四年 十二歳

頓坑で読書し、「書嵇康〈琴賦〉後」を作る。

一五九七 丁酉 明 神宗 萬曆二十五年 十三歳

福建平和県に至り、王文成公廟（王守仁祠・王陽明）が低地で狭いのを見て歎き、徘徊してから去る。

一五九八 戊戌 明 神宗 萬曆二十六年 十四歳

黄白術（丹砂を焼いて黄金を造る術）を好む。粵東（広東の東）博羅山中に神仙がおり煉丹材料があると聞いて、外戚の任官者に従って行く。博羅で「羅浮山賦」を作り、韓日績大夫の賞賛を得、多くの家蔵の異書を通覧して帰る。同時に「観海楼賦」を作る。

一五九九 己亥 明 神宗 萬曆二十七年 十五歳

博羅に寄寓する。当地の顕貴の婚儀を断り帰る。

一六〇〇 庚子 明 神宗 萬曆二十八年 十六歳

博羅より帰り荷を解くと、諸原稿が全て詩賦であったため、父の怒りをかう。父の命令で詩稿を焼き、科学の文章を勉強する。

一六〇一 辛丑 明 神宗 萬曆二十九年 十七歳

李文利（成化十六年举人、字は乾遂、号は両田、福建莆田の人、著『太楽律呂元声六卷』の「黄鐘長三寸九分」説にもとつき声律を研究する。

一六〇二 壬寅 明 神宗 萬曆三十年 十八歳

「疇象八卷」を作る。

一六〇三 癸卯 明 神宗 萬曆三十一年 十九歳

七月 「時事策」を福建当局に上書するも用いられず。

一六〇四 甲辰 明 神宗 萬曆三十二年 二十歳

春到北京に行こうとして大理寺に上書するが果たせず。平和に行き、大朋山（大峰山）に居る。

一六〇五 癸卯 明 神宗 萬曆三十三年 二十一歳

また広東に遊び、数ヶ月にして帰る。父に「族人の難」あり。「粵東舟中四章」、『黄漳浦集』卷三十九あり。

一六〇六 丙午 明 神宗 萬曆三十四年 二十二歳

「族人の難」により、漁鼓溪の頓坑に移住する。兄（三十八歳）と『易经』を松間に読む。秋に一六〇三年に
ついで藩臬（明代の布政司・按察司の別称）を干めるが遇されず。

一六〇七 丁未 明 神宗 萬曆三十五年 二十三歳

はじめて具試（邑生童試）を受験し、第一位となる。しかし四月に父が逝去（外艱）し、学籍を得られず。憂

愁憤鬱として「離疚」（別称「統騒」）『黄漳浦集』卷三十六）並びに序を作る。漳浦県令の黄応挙はこれを見て泣き、「余も亦た幼孤にして、黄子此の如き者、其の才全し」という。友人の林茂桂が序文を書く。父が亡くなる。親戚は乖離し、援助も無く葬式すらできず、殯（仮の埋葬）しただけであった。「九戾伝」を作る。

一六〇八 戊申 明 神宗 萬曆三十六年 二十四歳

漳浦に至り、盧司徒（維禎）の家塾で教え、寄寓するも樂しまず。林茂桂と面識を得る。孝廉の張燮（字は紹和）が折り良く漳浦に来て面識を得る。張燮が漳州に帰り、黄道周を高克正に推薦し、手紙で招請する。秋に招請に応じて漳州に行き、張燮の霏雲居に寄寓し、父の張廷榜、従弟の張煇叔（字は紹科）、薛士彦などと面識を得る。特に張煇叔と起居をとにもする。蔣孟育など漳州の士人が多く来訪して『易』を問う。

一六〇九 己酉 明 神宗 萬曆三十七年 二十五歳

父の喪が明ける。母を奉じて浦浦県城に新宅を築き移住する。

七月

会城に行き院試（郷試）を受けるが落第。帰途、釣龍江を渡ろうとして船が転覆し、水に溺れて恍惚として夢を見る。門人が東郭（東皋・浦東ともいう、後に東皋書舎・明誠堂となり、現在は黄道周記念館となる）を築き、張国経と隣人になる。林氏と結婚する。「徙沢記」『黄漳浦集』卷二十四）を作る。声律を続けて研究し、李文利の「黄鐘長三寸九分」説を否定し始める。（なお「易本象」の原稿が、漳浦の弟子、張若化・張若仲兄弟の所に存在する。）

一六一〇 庚戌 明 神宗 萬曆三十八年 二十六歳

時々漳州に行き、師友と學術の切磋琢磨をする。

一六一一 辛亥 明 神宗 萬曆三十九年 二十七歳

再度邑試（県試）に参加し、初めて郡試を受け、ともに第一位となる。

一六一二 壬午 明 神宗 萬曆四十年 二十八歳

「二歳寒暑之候論」などの文章によって、郡学の弟子員に補せられる。再び秋試（郷試）に赴くがまた落第する。家で銅山の弟子の陳士奇・陳瓚に教える。その後、東皋に隠れ読書する。

五月 蔡玉卿生れる。

《書哀宗將軍卷》（陸時化『呉越所見書画録』）

一六一三 癸丑 明 神宗 萬曆四十一年 二十九歳

東皋に杜門し、『太咸(函)経』を著す(注2)。

春 銅山に帰って故居を見て五古「癸丑春渡江出省旧居甫数日生平所愛強半分袂興仲猶待僕至心言為別鏡下作詩擬黄鶴遠別」(『黄漳浦集』卷三十九)詩を作る。

一六一四 甲寅 明 神宗 萬曆四十二年 三十歳

再び郡試を受け、第五位となる。座師は福建提学副使の鄭三俊(字は用章・玄岳)。「詩表」を作る。

一六一五 乙卯 明 神宗 萬曆四十三年 三十一歳

春 三たび広東に遊ぶ。

秋 三回目の郷試に赴く。典試(主考官)の来宗道・姜性ともに先生の文を第一に擬すが、違式のため及第せず。

来・姜は特に黄道周を旅館に招く。また鄭三俊に代わって「齒録後序」を草す。鄭が官職を去る時、黄道周を携行しようと水口駅(閩江途中)まで来るが、兄が母の命令といって追い返す。鄭は母の寿として百三十両を贈る。郷試中に黄景昉(著『黄道周誌伝』)と知り合う。

一六一六 丙辰 明 神宗 萬曆四十四年 三十二歳

杜門し、「春秋揆」などを著す。

一六一七 丁巳 明 神宗 萬曆四十五年 三十三歳

杜門し著述する。「林奎甫合選近義序」(『黄漳浦集』卷二十二)を撰す。

一六一八 戊午 明 神宗 萬曆四十六年 三十四歳

三回目の郡試で、主考官で福建学使(督学)の岳和声が、先生を第一に拔擢する。

八月

四回目の郷試に、時弊を標撃する策論により第七名で合格。その策論とは、「万曆四十有六年脚試策」(「勤政」「正学」「相権」「党禍」「边防」の五篇)および「人臣尽力事君論」である(『黄漳浦集』卷九)。座師は、丁紹軾、張孔教、張履端。郷試中に李世熊(著『寒枝集』)と知り合う。

十一月 明年春季の会試に参加するため、京師(北京)に行く。

一六一九 己未 明 神宗 萬曆四十七年 三十五歳

会試に落第し、京師より帰り、また東皋に杜門する。益々貧乏になる。「三易洞璣」を続けて著すも未完成。

制芸文章(制義・八股文)が友人によって『駢枝別集』として編成され上梓される。謝廷績の評、丘兆麟の閔、李輅、陳善、沈国元の参訂、張燮、陳士奇、陳瓚、林有柏、謝廷績の序跋がある。

一六二〇 庚申 明 光宗 泰昌元年 三十六歳

杜門し、続けて「三易洞璣」を著す。昼は布算、夜は天文を行い、外と交わらず。

八月十六日 劉道生兄弟の為に「古竺游誌小序」(『黄漳浦集』卷二十二)を撰す。

一六二一 辛酉 明 熹宗 天啓元年 三十七歳

秋 二回目の会試を受けるため北上する。『逆流小草』(黄道周の経書・制義の文章の結集)が刊行される。

一六二二 壬戌 明 熹宗 天啓二年 三十八歳

殿試に及第して進士となる(第二甲七十三名)。座師は、何宗彦、朱国祚、韓日績。同年の進士に、文震孟(状元)、傅冠(榜眼)、陳仁錫(探花)、方逢年、汪喬年、倪元璐、方一藻、鄭鄮、陳演、盧象昇、蔣德璟、徐石麟(以上第二甲)、史塗、王鐸、王家彦、馬思理、吳執御、毛羽建、張国経、馮元颺、張国維、馬如蛟、陳盟、祁彪佳、張鏡心、倪元珙、喬可聘、傅朝佑(以上第三甲)など、後に交友関係を持つ文士がいる。

六月 翰林院庶吉士に選ばれるが、貧乏で家を借りられず、漳州会館に住み、同年の武進士の莊烈(「莊譜」の編者・莊起儔の父)と往来する。

十月 魏璫(魏忠賢ら宦官一派)の虐焰が熾烈で、文震孟・鄭鄮と「尽言報国」を誓い合う。

一六二三 癸亥 明 熹宗 天啓三年 三十九歳

庶常(庶吉士)館で学習する。周起元(時に太僕少卿)の家に寄寓する。母陳氏と先妻林氏及び娘の黄子本を北京へ迎えるが、その上京途中、林氏が嘉興で病死する(孺人を贈らる)。周起元(時に蘇松巡撫)がその喪を行い、陳氏と子本を北京に護送する。「文明夫人行状」に林氏の「子本に謂ひて曰く」が見える。林氏と黄道周は万曆三十七年に結婚しており、子本はそれ以後に生れたことになる。なお黄子本は朱垣(字は伯勤、また子長と称す)と結婚しており、朱垣の父、朱節庵(?一六三七、漳浦の人)は举人で、黄道周の老友であり、崇禎十年三月、会試に参加中、北京で病死した。

一六二四 甲子 明 熹宗 天啓四年 四十歳

年初 館に散じ、翰林院編修を授かり、国史実録(『神宗実録』)の編修に参与する。

朝鮮への使者を願ひ出るが果たせず。

一六二五 乙丑 明 熹宗 天啓五年 四十一歳

春 劉其忠と隣居する。宦官の魏忠賢が大々的に東林党の人士を逮捕し投獄し殺す。

三月 はじめて経筵展書官に充てられる。膝行奉書に反して、平歩して進んだため、魏忠賢の目を憚った。
四月 老母を養うことを口実に帰郷を願ひ出る。陳氏、黄子本を故郷に返し、常州に行き鄭鄞に逢う。蘇州に行き、
文震孟に逢う。

七月 漳浦に戻る。張燮の『七十二家文選』刊行に資金提供し、返却される。

十二月 漳浦の北山（別名、州市山・石養山）によりやく父黄季春を埋葬し、廬をその墓下に結ぶ。終生ここに住む。

一六二六 丙寅 明 熹宗 天啓六年 四十二歳（蔡玉卿十五歳）

漳浦の北山で墓を守る。先妻林氏の喪が明け、計部蔡乾釜の姪の蔡玉卿（字は潤石）と再婚する（約春三月）。

しかし二ヵ月後（約五月）には、黄の母陳氏太夫人が病歿する。喪に服すること三年、宴飲・吟詠・書画を禁じ

る。周起元が逮捕され、資金を集めて救済を図る。周起元が死去し、「周忠愍公墓誌銘」（『黄漳浦集』卷二十

七）を撰す。

一六二七 丁卯 明 熹宗 天啓七年 四十三歳（蔡玉卿十六歳）

漳浦の北山で墓を守る。母の喪の弔信のお礼に、「答葉文忠公書」（『黄漳浦集』卷十八）を撰し印章四顆を贈

十二月 父母を北山の墓に合葬し、「贈考青原公墓碑（篆文）」（『黄漳浦集』卷二十五）を撰し手書す。

一六二八 戊辰 明 思宗 崇禎元年 四十四歳（蔡玉卿十七歳）

漳浦の北山で墓を守る。祖母、伯父、叔父を葬る。また先妻林氏を北山の墓の左に葬る。

徐霞客が漳浦に黄道周を訪問し、交友を結ぶ。但し守制（喪中）のため唱和せず、書画を描かず。

四月 喪が明ける。

五月 詩文を作り始める。《迹23行書五律詩軸「倚鋤有作」》（浙博）

一六二九 己巳 明 思宗 崇禎二年 四十五歳（蔡玉卿十八歳）

冬 「三易洞璣」完成。母の喪が明け、墓を辞して蔡玉卿とともに北上する。

弟子の張瑞仲（字は昂之）とともに、万石山に隠居する親友の張燮・張煇叔を訪問する。

《1奉張燮之詩卷「過万石山二章」》（北京市文物局）

一六三〇 庚午 明 思宗 崇禎三年 四十六歳（蔡玉卿十九歳）

正月 金（後の清）が遷安、遵化、灤州、永平を陥落する。正月の初め、信州（今の江西上饒市）に居り、十五日、

浙江桐君山・釣台に居る。吳門（蘇州）で陳仁錫・蔡保楨と面会する。

二月十七日

毘陵の鄭鄭の家に寄寓。家族を預け、一旦単身北上するが、儀真で呼び寄せて上京する。徐霞客と再会する。《2 録呈鄭鄭等十五首卷（故宮）》《3 旅雁蒼生在五律詩軸（王壯為藏）》

五月

浙江郷試の典官（主考官）に命ぜられ出京する。

六月

張獻忠が八大王を自称する。八月に袁崇煥が毛文龍を殺すという事件が起こる。

八月二日

杭州に到着。九日から十五日まで郷試を行う。解元の曹振龍、挙人の何瑞図、孟応春、朱朝瑛、錢朝彦、陸鳴燴など、後の大滌書院の弟子となる。

十一月廿六日

『神宗実録』が完成し、翰林院編修から初めて右春坊右中允に昇進。宴席に出る。《迹20行書五律進神宗実録有作軸（遼博）》

十二月

袁崇煥が冤罪を被り入獄し、礼部尚書兼東閣大学士の錢龍錫が、その袁から巨額の賄賂を受け取ったと誣告され投獄される。黄道周は錢龍錫を救出するため、「救錢龍錫疏」（『黄漳浦集』卷一）を上奏する。

一六三一 辛未

明 思宗 崇禎四年 四十七歳（蔡玉卿二十歳）

正月

「遵旨回活疏」を上奏し、「曲庇罪輔」により三級降格の調用となる。

二月中旬

昨年の浙江郷試で、考生の尚觀声を合格者名簿から削除した件で嫌疑をかけられ、礼科に糾弾される。

四月

《楷書七律前後嘉命辭為前後宗伯十章卷（上博・滬1-1779）》

五月

錢錫龍が釈放され、定海衛に左遷となる。《行書与娘婿朱垣書（中国書法87・1）》

十月〜十一月

倪元璐が上奏し、黄道周を「古今第一詞臣」と推奨する。徐汧も黄道周・倪元璐の賢人を上奏して称賛する。

閏十一月

「於補任之日罰俸一年」の処分が下り、かつ尚觀声に挙人の資格を与える。

十二月廿一日

長男の黄覺（別名子中、字は仁表）が生れる。

一六三二 壬申

明 思宗 崇禎五年 四十八歳（蔡玉卿二十一歳）

正月

装束を整えて出発しようとした時、黄道周は「放門陳事疏」（『黄漳浦集』卷二）を上奏し（注3）、さらに

「放門回奏疏」（『黄漳浦集』卷二）を上奏した結果、崇禎帝の「怒ること甚だしき」をかう。

《4 和黄平倩等詩卷（上博）》《5 祉翁姻丈帖（故宮）》《6 楷書七律壬申元日詩六章冊（浙博）》

《7 束装行帖（故宮）》《8 奉泰器先生収録十三首詩卷（故宮・京1-2778）》

二月

疏文は「濫奉・呈臆」と反駁され、「遂に籍を削られて（平民となり）帰る」ことになる。これを聞いた蔡玉

卿は喜び、「幸なり」と言う。誕生日の九日、蔡玉卿と満一歳になったばかりの長男黄慶を伴い、離京する。帰郷の途中、濟寧・兗州・曲阜・太湖・淮南・南京を経て、余杭に立ち寄り、大滌書院の創建に会う。（大滌書院ではその後、崇禎十一年、十五年四・五月、十七年と四度の講学を行う。江浙の弟子が四五十人に達した。）
《9 濟寧聞警詩軸（個）》、《迹2 米万鐘墓表》、《行書大還小還詩（鄂1-076）》
南京から岳父蔡乾鑿に「与外氏書」（『黄漳浦集』卷十九）を呈す。

四月

五月～七月

蔡玉卿母子を南京に留め、単独で長江を遡り、牛首山（江蘇江寧県）・池山・齊山・九華山（安徽貴池県）・浮山（安徽桐城県）・湖口（江西九江市）をめぐる、廬山に登り、後に南京に帰る。楊廷麟に逢う。その後、京杭大運河に沿って南下し、撰山（南京東北）・焦山（鎮江市）・常州・茅山（句曲山、江蘇金壇県、華陽九洞がある）・包山（西洞庭山、太湖の中にある）に遊び、また竹塢（文震孟別墅）・華山寺（蘇州市西）・寒山寺・天平山に遊ぶ。ついで余杭に行き、弟子の何義兆と大滌山・徑山に遊ぶ。常州では鄭鄖に再会し、茅山では周鏞に逢い、また徐霞客と三度目の出会いをし、一緒に包山に遊んで蘇州まで下る。

《黄道周・蔡玉卿楷書自書詩（鄂3-046）》

八月

黄山・白岳（安徽休寧県）・天目山、天台山・雁蕩山に遊び、冬に帰郷する。《雁蕩山図（津7-0427）》

《行書詩三開（浙1-109）》《行書和王宇泰詩（閩1-021）》

冬

漳浦北山の墓廬に帰る。「梁山鋒山賦」（『黄漳浦集』卷三十六）を作る。福建南靖県の諸山に遊ぶ。

一六三三

癸酉

明 思宗 崇禎六年 四十九歳（蔡玉卿二十二歳）

漳浦北山の墓廬で講学、著述する。制芸文章（八股文）を少なからず書く。

秋

弟子の洪京榜・張瑞鐘と「鄴山書院」（福建龍海鄴山）を初めて建築するが成らず。黄道周は蓬萊峽を焦桐山、鄴侯山（鄴山）と改称する。徐霞客が漳浦に黄道周を尋ね（三度目）、四度目の出会いをする。（二人は崇禎元年、三年、五年、六年、十三年、十四年、十五年と往來の足跡がある。）

一六三四

甲戌

明 思宗 崇禎七年 五十歳（蔡玉卿二十三歳）

漳州芝山の「榕壇」（正学堂、紫陽学堂ともいう）を講舎として九回講学をする（十二月）。

《迹38 行書榕壇問業殘冊四十五開（遼博・遼1-264）》

八月

「王文成公碑」（『黄漳浦集』卷二十五）と「王忠文公碑」（同前）を書き合せて一卷とする。

《迹35 楷書漳州新建王忠文先生碑祠冊（広東省博物館）》

九月 張燮の父廷榜のために「張大夫墓表」(『黄漳浦集』卷二十五)を撰す。

十月 《10双溪口惠政碑卷(故宫・京1-2779)》

漢代以来の賢人能臣三十六人の評伝、『懿畜』前後編が完成する(『黄漳浦集』卷三十四・三十五)。「草書〈千文〉冊」を作り、弟子の呂士壘に与え、陳望卿が泉州で刊行する。

一六三五 乙亥 明 思宗 崇禎八年 五十一歳 (蔡玉卿二十四歳)

春 漳浦北山の墓廬で「与洪尊光(京榜)編問業修業書」(『黄漳浦集』卷十八)を撰す。

五月〜十一月 榕壇および王家園に弟子を集めて教え、学問に精力を注ぐ。五月《11行書榕壇頌卷(故宫・京1-2780)》
十一月十六日 「榕壇」冬季大会中に、「清望」起用の旨が届き、崇禎三年時の右春坊右中允兼翰林院編修に復官する。講学を止めて、漳浦に帰る。類書『博物彙』二十卷刊行(内閣文庫蔵刊本あり)。

一六三六 丙子 明 思宗 崇禎九年 五十二歳 (蔡玉卿二十五歳)

四月 金のホンタイジ(皇大極・清太宗文皇帝)が清を建国。

七月 清軍が居庸関に至り、高迎祥が陝西巡撫の孫伝庭に捕えられ、部下の李自成が闖王になる。
九月 官に戻るため、装束を整えて出発する。出発前に『榕壇問業』三六五条問業を建議する。

《12丙子秋送省試二首詩扇(故宫)》《13贈蔣仲兄聞警出山詩軸(故宫・京1-2781)》《14聞奴警出山詩軸(上博・滬1-1768)》《15出山答朱日甫詩軸(蘭)》《迹5行書臨王羲之誓墓文卷(天津市芸術博物館・津7-0428)》
十二月 入京する。

一六三七 丁丑 明 思宗 崇禎十年 五十三歳 (蔡玉卿二十六歳)

二月中旬 会試で「詩」一房を考査し二十一士を得る。後に黄道周と交友関係が密接な者に、陳子龍、夏允彝、堵胤錫、錢肅樂、劉同升、趙士春、陸自岩、張天維、孫嘉績、吳嘉禎、王行儉、唐階泰、蔣棻、蔣鳴玉、柯元芳、余忠宸、吳春枝、尹文煒、侯鼎鉉、陳之遴、黄澍らがあり、歴史に名を留める者に、揭重熙、曹溶、沈履祥、胡夢泰、何弘仁、錢棟らがいる。会試期間中、受験者の朱節庵(娘黄士本の夫・朱垣の父)が北京で病死。
五月 諭徳・兼掌司経局に昇進。閏五月《16長安偶作九首詩冊(故宫・京1-2782)》。
六月十三日 辞職の上奏文を具し、「臣有三罪四恥七不如」の詞により自身を弾劾す(「三罪四恥七不如疏」『黄漳浦集』卷一一)。

九月 《趙文毅公文集序卷(常熟市文物管理委員会・蘇4-020)》

十二月 經筵日講官・詹事府少詹事協理府事・兼翰林院侍讀學士・兼管理玉牒に昇進。いずれの職位も断るが許されず。

一六三八 戊寅 明 思宗 崇禎十一年 五十四歳 (蔡玉卿二十七歳)

二月 崇禎帝の講經の筵に侍し、召対に随伴する。

六月 「督臣の不拘守制」、「大督臣の奪情」、「遼撫臣の議款」の三疏を上奏する。さらに楊嗣昌・陳振甲らが「奪情」

して入閣したことに対し、上奏文を奉る (『論楊嗣昌疏』「論陳振甲疏」ともに『黄漳浦集』卷三)。

七月五日 黄道周と楊嗣昌は、崇禎帝の面前で「綱常」をめぐる論争し、その結果またもや崇禎帝の怒りを買ひ、「朋

串僥乱」の罪に擬せられる。

八月 江西布衣政司都事に左遷。蔡玉卿は「邸報」を見て帰郷を予測し喜んだという。蔡の予言どおり「謫官せられ

て帰る」ことになる。黄道周は帰途、泰山に登り、冬に余杭の大滌山書院に立ち寄り、陳子龍・倪元璐と逢う。

一六三九 己卯 明 思宗 崇禎十二年 五十五歳 (蔡玉卿二十八歳)

崇禎十二年から十三年春まで、漳浦北山の墓を守り、一切の來客を謝絶する。

二月 《18贈無涯答諸友詩卷》迹6行書贈答諸友詩卷 (南博・蘇24 0306) 《『黄漳浦集』卷四十三・四十一》

九月 《19致鄭牧仲札 (故宫)》

《迹8周順昌神道碑卷 (南博・蘇24 0307)》《行書詩卷 (京12 074)》《17己卯初冬和戴伯闇詩翰卷 (台北故宫)》

一六四〇 庚辰 明 思宗 崇禎十三年 五十六歳 (蔡玉卿二十九歳)

五月廿三日 逮捕命令が下り、墓を辞して南昌に向け出発する。復社の領袖張溥 (天如) が、黄道周の「詔獄」(注4)を

聞き、切齒扼腕し、特別に宜興に赴き、座師の周延儒に手段を講じて救済し、ならびに東林党人を起用するこ
とを勧める。

七月下旬 南昌で逮捕され、北京に護送される。

八月一日・二日 「廷杖八十」の刑を受け、その後、刑部に旋回され、投獄される (翌一六四一年十二月までの十五ヶ月間)。

獄中では金銭が必要であろうと、漳浦の人たちが三日で「数百緡」を集めたが、黄道周も蔡玉卿も断った。

十二月下旬 北鎮撫司に移送され拷問される。

《行書寄子書三開 (桂1-051)》

一六四一 辛巳 明 思宗 崇禎十四年 五十七歳 (蔡玉卿三十歳)

五月二十日 刑部に返送される。『孝經』を百二十本書写する (注5)。

秋 《迹9小楷孝經冊》

八月 《20定本孝經冊（故宮）》

十二月十九日 出獄し、湖南辰陽（今の湖南辰溪県の西）に左遷となる。蔡玉卿の予言どおり「生還」する。

一六四二 壬午 明 思宗 崇禎十五年 五十八歳 （蔡玉卿三十一歳）

正月 《迹12行書七律詩軸》《21為永明隸書冊（故宮・京1-2785）》

二月 出京する。

三月 《22贈屈靜根詩軸（東博）》・《31隙照合無恙五律詩軸（北京市文物商店）》

五月 大滌に立ち寄る。《23孫伯觀疏林摧倦翮詩軸（三重澄懷堂）》《24日從雲間諸友札（故宮）》《25・迹11贈高仲兄丈

文語軸（上博）》《29大滌山中贈孟閔庵五律詩軸（南博）》

六月 九江に至る。

八月 長沙に至り、恩赦に遇い、少詹事に復職する。

十月一日 南京から使者が訪れ、「赦罪還職」の聖諭を受ける。

帰郷後、「鄴山講舍」を造営し、講学に従事する。（「鄴山講舍」は福建省龍海県歩文郷江東橋畔鄴侯山麓にあり、漳州市から南西へ十六km離れる。）

十一月 再度、大滌に行く。《26洗心詩軸（個）》《27別諸友人長沙詩軸（故宮）》《28為倪元璐母寿作詩冊（故宮）》《楷書

霽曾公墓誌銘卷（故宮・京1-2787）》

《迹10行書五絶詩卷（与倪元璐行書合卷）（上博）》・崇禎十五年以後《30偶答張湛虛大理詩軸（首都博物館）》

《行楷書五言詩（粵1-0268）》《行書五言詩四開（京1-2786）》

一六四三 癸未 明 思宗 崇禎十六年 五十九歳 （蔡玉卿三十二歳）

二月 《迹13行書七律詩卷（浙博・浙1-110）》

三月 北山に帰り墓を守る。

《行書自書詩卷（京2-231）》

一六四四 甲申 明 思宗 崇禎十七年 六十歳 （蔡玉卿三十三歳）

南明 福王（朱由松）・清 世祖 愛新覺羅福臨 順治元年

正月 北山で致仕を乞う上奏文を奉る。

三月十九日

崇禎帝崩御。(李自成がこの年の正月に、西安で建国して大順と号し、三月十五日に居庸関を破り、十七日に京師を包囲し、十八日に外城を攻め、崇禎帝に縊死を逼り、十九日朝、内城を攻め破り、崇禎帝は煤山で縊死した。)

五月五日

福王が南京で監国として即位。

五月九日

鄴山の「三近堂」に会合する。『黄漳浦集』巻二十四に「三近堂記并銘」「鄴山書院記」「樂性堂記」「与善堂記」があり、「樂性堂記」の冒頭に「諸生の鄴山に至る者、徳を与善に討め、功を三近に徴め、容を樂性に従ふ」とある。注6) 黄道周は、崇禎帝が崩御したことを、後れて「鄴山講堂」で聞いた。『32贈眉仲戴蓬萊峽即事詩軸(故宮)』

六月上旬

五月十六日付で「吏部左侍郎兼翰林院侍読学士」として召用されたことを聞く。

八月

「明誠堂」「明誠書院」が落成し、門人と講学する。(二度の正式な大会で、数百人が参加する。「東臯書舎」ともい、福建省漳浦県城東約一kmにある。黄道周の講学処である。四合院式堂屋を改建し、「中庸」に義を取り「明誠堂」と名づけ、弟子に「明誠」二十六章を講述した。一九六一年に修復し、現在は「黄道周紀念館」になっている。)

九月十五日

墓を辞し南京へ向け出発し、晋安に向う。『迹15楷書曹遠思推府文治論卷(個)』

十月

『33贈顧咸建武夷別諸子詩軸(故宮)』

十月廿一日

浙江衢州に居た時に、九月十九日付で「礼部尚書兼翰林院侍読学士協理詹事府」に昇進したことを聞く。

十二月

『34贈湘正諸友別茗水詩軸(故宮)』『35贈康流兄出大滌山詩軸(上博・滬1-1170)』『36舟次吳江詩軸(故宮)』

『行楷論読書(粵2-124)』

『楷書張溥墓誌銘卷(京1-2788)』『行書五言詩軸「信有断鼃足」(京1-2789)』『行書五言詩軸(京1-2790)』

一六四五 乙酉

南明 福王(朱由崧) 弘光元年 六十一歳 (蔡玉卿三十四歳)

唐王(朱聿鍵) 隆武元年・清 世祖 愛新覺羅福臨 順治二年

正月

南京に到着し職に就くが、逆党の馬士英・阮大鍼の専制政治により、正直な朝士は排斥されたため、弘光政權に失望する。二月十七日『迹14隸書題文從簡介石書院図卷(上博)』

二月廿三日

浙江紹興に赴いて禹陵を祀ることを上疏し、批准される。『37贈抑庵将入会稽詩軸(故宮)』

三月一日

舟で出発するも風に拒まれ延期する。四男黄褒の誕生。『迹16小楷書張溥墓誌銘卷(故宮)』

四月一日 紹興に至り、七日間物忌みする。《38 雨滯廟灣詩扇（上博）》

八日 禹廟に至り、まもなく「奉祀会稽乞休疏」を奉った。《39 贈倪獻汝叔侄詩軸（故宮）》《40 致倪獻汝札（故宮）》
五月 清軍が南京を占領する。《41 贈龍尹兄東陽聞警詩扇（故宮）》

七月 唐王が福建福州（大興府）で即位して天子となり、黄道周は「少保兼太子太師吏部尚書武英殿大学士」となる。すでに国勢が衰退し、政治も武人の鄭芝龍（国姓爺鄭成功の父）の手に帰っていた。

八月三日 隆武帝が延平（福建延平府）に親征することを聞き、上奏して諫め止める。

十一月 広信知府（信州・江西上饒市）の解立敬、知県の蔣元士、郷紳の詹兆恒・王孫番らから信州に入ることを請われ、徽州（安徽）にて会うことを決意する。

十八日 建陽（福建）に到る。

九月十九日 閩（福建と江西の境）を出る。応募した兵士が九千余に達するが、不練の兵士が多く、敵に対抗することができなかった。《42 致仲球・叔宝札（故宮）》

十月朔日 広信に到るが、徽州がすでに九月二十三日に破られたことを聞く。

九日 諸将を撫州（江西省撫州市）・婺源（江西省婺源県）・休寧（安徽省休寧県）の三地へ分けて派遣する。

十一月 広信で婺源と休寧の二師団の壊滅を聞き、ついで撫州の師団も潰える。広信より衢州（浙江省衢県）に出陣する。《43 致祖台札（故宮）》

十二月六日 婺源に侵攻し決戦に挑む。童家坊（江西）に到り、樂平（江西）が破れたことを聞く。信州の人民が黄道周に帰還を要請するが、さらに侵攻する。

廿四日 新建（江西）より明堂里に到り、清兵に遭って大敗し、諸同人とともに逮捕される。婺源に連行されるが、食事をとらなかった。

《楷書弘光元年討賊檄草及上書十一開（滬1-1771）》《行書為素山詩（杭州市文物考古所・浙5-050）》

一六四六 丙戌 南明 唐王（朱聿鍵） 隆武二年 六十二歳（蔡玉卿三十五歳）

清 世祖 愛新覺羅福臨 順治三年

正月廿四日 南京に連行される。《44 後死吟等三十首詩卷（故宮）》

三月五日 処刑される。享年六十二歳。一緒に頼継謹、趙士超、毛玉潔、蔡春溶の四人が殉死した。

一六五二 壬辰 清 聖祖 愛新覺羅福臨 順治九年（蔡玉卿四十一歳）

蔡玉卿は清軍の侵攻を漳郡に避け、包囲されること半年に及び、城が破られる。黄公夫人の為に二百金を奉じて長寿を祝うことを知り、固く拒否する。包囲の厳しい城より出で、山を買って遠遯し、龍潭に卜居する。そして長齋すること二十年に及ぶ。

一六九四 甲戌 清 聖祖 愛新覺羅玄燁 康熙三十三年（蔡玉卿八十三歳）
二月 蔡玉卿卒す。享年八十三歳。

【注】

1 「文明夫人行状」については、拙文「蔡玉卿の生涯」『文明夫人行状』考（『大東文化大学紀要40（人文科学）』所収）を、

また蔡玉卿の書については、拙文「黄道周と蔡玉卿—蔡玉卿詩書画考」（『書学書道史研究11』所収）を参照されたい。

2 『太咸経』は『易』類に属す著作で、漢代の揚雄が『周易』を摸倣して『太玄経』を著したのに似る。黄道周は天啓・崇禎年間に晋の范望注『太玄』を翻刻している。

3 「放門陳事疏」において、易の〈師の上六〉卦辞は、「大君命有り、国を開き家を承く、小人は用ふること勿れ」であり、「上六」は師の卦の終極にあって乱平らぐの時を意味し、「大君」すなわち天子から、ありがたい「命」つまり恩命が下る論功行賞の時であるが、「小人」は諸侯や卿大夫に任用してはならないし、これを任用すれば、将来国を乱し、民を害するようになる、と主張した。

4 紫禁城警護の禁軍の錦衣衛には、正規の裁判を通さない君主直属の監獄が置かれていて、この監獄を「詔獄」と称し、君主の命令一つで簡単に人を罪にすることができ、ここではリンチともいえる過酷な拷問が日常茶飯事に行われていた。

5 獄中で書写した墨跡《孝経》には次の八件が伝来する。①楷書《孝経定本冊第三十四本》東京国立博物館蔵、②楷書《孝経定本冊第十七本》台北故宫博物院蔵、③楷書《孝経定本冊》北京故宫博物院蔵（京1-2783）、④楷書《孝経定本冊》瀋陽故宫博物院蔵、⑤楷書《孝経冊》広東省博物館蔵（粵1-0267）、⑥行書《孝経冊》西泠印社蔵、⑦行書《孝経卷》天津市芸術博物館蔵（津7-0430）、⑧楷書《孝経頌冊十二開》天津市芸術博物館蔵（津7-0429）。また蔡玉卿代筆に《小楷孝経》北京故宫博物院蔵（京1-2784）がある。詳細は、拙文「黄道周獄中手書《孝経》考」（『中国化学会編「中国文化59」』所収）を参照。

6 上海辞書出版社『中国名勝詞典』に「鄴山講堂」と「東皋書舎」の記載があるので訳出する。

「鄴山講堂」—龍海県歩文郷江東橋畔鄴侯山麓に在る。山を背に江に面し、漳州市から南西へ十六km離れる。黄道周の講学処である。崇禎十五年（一六四二）、赦免され復官した後、帰郷してここに「鄴山講堂」を造営し、講学に従事した。講堂はすでに

壊れたが、周囲の峭壁には黄道周が手書した石刻が五箇所残っている。「蓬萊峽」(楷書・字径二尺余)「石齋」(署名)、「芙蓉峽」(行書・字径約四尺)、「鳥道不絶風雲通」と「墨池」(隸書・字径一尺余)。別に江中石上に「游磬」二字(楷書・字径約二尺)がある。このほか黄寛・黄可潤などの石刻がある。

「東皋書舎」――漳浦県城東約一kmに在る。黄道周の講学処である。崇禎十七年(一六四四)、四合院式堂屋を改建し、「中庸」に義を取り「明誠堂」と名づけ、弟子に「明誠」二十六章を講述した。堂内に黄道周手書「東皋書舎」「明誠堂」および対聯「人従剥復後始見天地之心、我在猷畝中猶樂堯舜之道」がある。天井に「天方図」があり、俗に「天地盤」と呼ばれる。石板を切って成ったもの。台階は二層で、長さ三・七m、高さ四二cm、盤面に一万六千二百八十四方格を刻し、方格間に同心円を八圈刻す。円圈は天を、方格は地を示す。その著述『易本正』『易象正』『三易洞璣』を綜合し、天文曆象を講じ分析したものである。一九六一年に修復し、「黄道周紀念館」を建てた。